

ミケア預言書

預言者ミケアは、イザヤ、オゼー、アモスと同時代の人で、ファイリスト人の地との境界に近いユダ領内モレシエト（ヴルガタではモラステイ）に生まれた。

北方王国でアカブ王の時代に活動した同名の預言者は、この人とは別人である（王上二二・八以下参照）。

第一章

サマリアとユダとに対する天罰

一 ユダの王ヨアタン、アカズ、及びエゼキアの時代、モラステイ人ミケアに下りし主の御言、是は彼がサマリアとイエルサレムとに就きて見しものなり。二 万の民よ、汝等聴け、地と之に満てるものとは意を留めよ、主なる天主汝等に対し証を立て給えし、¹⁾ 主その聖殿²⁾より然なし給えかし。³⁾ 三 即ち視よ、主御住居を出でて下り、地の高き処を踏み給わん。⁴⁾ 四 時に山々彼の下にて熔け、谷々裂けて、火の前の蟻の

第一章 1) ある人に対する天主の証しとは、審判というに同じ。— 2) 三節の示す如く「天国」。— 3) 申三二・一。賽一・二。
4) 賽二六・二一。

五 如く、また断崖を流れ落つる水の如くなるべし。是は全くヤコブの悪と、イスラエルの家の罪とに由るなり。ヤコブの悪とは何ぞや。サマリア⁵⁾にあらずや。ユダの高き処とは何ぞや。イエルサレム⁶⁾にあらずや。六されば我サマリアをば、葡萄酒を作る時の野にある石堆⁷⁾の如くなし、その石を谷に投げ落して、その基を露にせん。七その彫像は皆打ち割られ、その媚の価⁸⁾はすべて火に焼かるべし。我その偶像を悉く亡ぼさん。それ、是等は娼婦の玉代もて集められたるにより、また娼婦の玉代になるべし。九この故に我嘆き叫ばん、衣を剥がれ裸にて歩まん、竜¹⁰⁾の如く嘆き、駝鳥の如く哀しまん。実にその傷は癒ゆる望絶えたり、そは既にユダにまで至り、わが民の門に達し、イエルサレムにまで及びたればなり。11) 汝等¹²⁾之をゲト¹³⁾に告ぐるなかれ、涙し

5) そこで行われた偶像礼拝
6) 註五と同じ。 — 7) 葡萄酒の上にある石や土の中から掘り返した石を一所に集めて積みあげた。 — 8) サマリア人が偶像に献げた奉納物
9) アツシリア人はサマリア人の神々に献げた物をバビロンへ持ち帰つて彼らの神々に献げるだろ。 — 10) 山犬。 — 11) 荒廢はサマリアから進んでイエルサレムに至る。 — 12) 以下のヘブレオ語原文には方々の町の名に対して語呂合せのような洒落が用いてある。 — 13) ゲトとは「知らせる」の意。

二 二 14) 嘆なげくなかれ、塵ちり15) の家いえにて汝等なんじらの身みに塵ちりを振ふりかけよ。二 汝等なんじら美うるわしき処ところ16) に住すめる者ものよ、恥辱はじに赧あからみて通とおりゆけ。国境くにさかい17) に住すめる者ものは出いでざりき。固かたく立たてる隣となりの家いえ18) は汝等なんじらより嘆なげきを受うくべし。三 そは苦にがきが中なか19) に住すめる者もの、善ぜんに對たいして弱よわくなり、災厄わざわい主しゆの御許みもとよりイエルサレムの門もんに下くだりたればなり。三 車くるまの轟音とどろきはラキス20) に住すめる者等ものどもを愕おどろかしたり。そは娘むすめシオンにとりて罪つみの源もとなり、これ汝なんじの中うちにイスラエルの悪事あくじ見みえたればなり。一四 故ゆえに彼かれはゲトの世嗣よつぎに使者等つかいたちを遣おくらん。虚偽いつわりの家いえ21) はイスラエルの王等おうたちを欺あざむかんとす。一五 然しかれども我われは汝なんじマレサ22) に住すめる者ものに、なお世嗣よつぎを伴ともなひ行ゆかん。一六 イスラエルの榮さかえ23) はオドラム24) にまで及およぶべし。一六 汝なんじの愛いとし子こ等らの為ために、汝なんじの頭こらべを禿かむろとなし、汝なんじの鬚ひげを剃それ。汝なんじの禿かむろを驚おどろ25) の如ごとくに大おおきくせよ、そは彼等かれら擒とらわれて汝なんじの許もとより引ひき去さらるればなり。

14) ヘブレオ語「ベカイム」は「泣く」の意。—15) ヘブレオ語「ベトレアフラ」即ち塵の意。—16) シヤファイル。—17) ザアナ。—18) ベトハザエン。—19) マロト(マルは「にがし」)。—20) ユダ族領の南部にあり。—21) アクシブ(いつわり)。—22) マレサは「所有」。—23) 皮肉。—24) ユダ族領内にあり。—25) 「禿鷹」とする方可

第二章

イスラエルの指導者たちに対する罰とイスラエルの不幸

一 禍わざわいなるかな、汝等なんじらその臥床ふしどにて益えきなき事ことを凶はかり、悪事あくじを行おこなう者もの。彼等かれらは曙あけぼのの光ひかりの中なかにて之これをなす、そは彼等かれら天主てんしゆに手向てむかえばなり。二 彼等かれらは烟はたけを貪むさぼり強しいて之これを取り、また家々いえいえを奪うばいて、人ひととその一家かとを虐しいたげ、人ひととその家督かどくとを虐しいたげたり。三 この故ゆえに主しゆかく云い給たまはる、視みよ、我われこの族やからに對たいして災禍わざわいを凶はかる。汝等なんじらは己おのが頸くびを之これより引放ひきはなすことなく、昂然こうぜんと歩あゆむことなかるべし、そは最悪いとおしき時ときなればなり。四 その日ひには人々ひとびと汝等なんじらに就つきて嘲あざけりの言ことばを云い出いで、節面ふしおもしろ白しろく歌うたを唱うたわん、曰いく、我等われらは絶たやされ滅ほろぼされたり。わが民たみの分ぶんは人手ひとでに移うつれり。我等われらの地ちを分わかたんとする者もの歸かえり来きたりつつあるに、いかで我われより退しりぞくや。五 この故ゆえに主しゆの会つどいにおいて、汝なんじの為ために籤取くじとりの測繩はかりなわを張はる者もの一人ひとりもあらざるべし。六 汝等なんじら語りて云いうなかれ、是等これらの者ものには預言よげんの与あたえられず、恥辱はじ彼等かれらに及およぶことなからん、と。七 ヤコブの家いえは云いう、主しゆの御心みこころ狭せまくなれるか、またその思おもひ

第二章

1) 彼ら

は夜休

んでい

る間に

次の日

どうい

う悪事

を行お

うかと

考えめ

ぐらす

2) 禍の

予言。

八 給う所³⁾ かくの如きか。わが言、直く歩む者に益とならざるか。八 然るにわ

が民は却つて起ちて敵となれり。汝等は衣の上より袍を取り、悪意なく過ぎ

行きし者等を鬭争に巻きこみたり。九 汝等はわが民の女等をその楽しみ居り

し家より逐い出し、恒久にその子等よりわが讚美を奪い取れり。一〇 汝等起ち

て去れ、此処にては汝等安息を得ざればなり。此はその汚穢の為に甚だしく

腐敗して滅びん。二 我、靈を具えたる人にあらずして、虚偽を語り得ば幸い

ならんに。我葡萄酒と酩酊とに對して、汝に預言を漏らさん。その係るべき

者はこの民なるべし。三 ヤコブよ、我汝を悉く集え聚め、イスラエルの残

存者を招き寄せて一つにし、彼等を檻の中の羊群の如く、罅の中の羊の如く

共に置かん。彼等は人の多きに由りて打ち騒ぐべし。一三 蓋し彼等の前に道を

拓くべき者上り来らん。彼等は門を押し破りて通り、そこより進み入るべ

し。彼等の王その前に立ちて通り、また主その先頭に立ち給わん。4)

3) 報復の

ための罰

を下そう

とのお考

え。

4) エジプ

トを出た

時、天主

が火の柱

の中に在

してかれ

らを先導

し給うた

ように。

第三章

悪しき君、偽予言者に対する真の予言者―彼等に対する罰

一 我また云いけらく、ヤコブの諸侯、及びイスラエルの家の牧伯等よ、汝等聴けかし、公義を知るは汝等の本分にあらずや。二 汝等は善を憎み、悪を好み、非道にも人々よりその皮を、その骨よりその肉を剥ぐ者にして、三 わが民の肉を食い、之よりその皮を剥き取り、その骨を打ち碎き、また切り刻みて、恰も釜に入るるが如く、鍋の中に入るる肉の如くなしたり。

四 かの時彼等主に向かいて叫ばん、されど彼之に応え給わじ、却つて彼等がその企図により悪しく振舞いたる如く、その時之に御面を隠し給うべし。一) 五 わが民を迷わし、齒にて物嚙む内は平安を説けども、二) 人その口に物を与えざる時は、之に対して戦闘を聖なるものと称する預言者等に就きて、主かく云い給う、六 この故に汝等には異象の代りに夜あり、神託の代りに暗黒³⁾ あらん。しかして預言者等を照らす日は没み果て、昼も彼等に

第三章 1) 彼

らは復讐法によつて裁かれるだるう。

2) 食べるに十分な贈り物を

自分達にくれる人々には善

いことを告げるが。―3) 夜

や闇は禍の象

どり。

七 は暗くなるべし。七かくて4) 異象を見る者等は恥辱を蒙り、神託を告ぐ

る者等は狼狽せん。彼等は皆、天主の応答なきに由りて、その顔を掩う

八 べし。八されど我はなお主の靈の能力に満ち、ヤコブにその悪を、イス

九 ラエルにその罪を告ぐべき公義と気力とに満ちたり。九汝等之を聴け、

ヤコブの家の諸侯、及びイスラエルの家の士師等、公義を憎み、凡て直

一〇 き事を曲ぐる者、一〇血もてシオンを、不義もて5) イエルサレムを建つる

者よ。一一その諸侯は賄賂を取りて裁き、その司祭等は報酬を取りて教

え、その預言者等は金錢を取りて神託を告げたり。しかも彼等は主を頼

みて云いぬ、主は我等の中央に在すにあらざや、災厄我等に臨むことあ

一二 らじ、と。6) 一二されば汝等ゆえにシオンは畑の如く耕され、イエルサレ

ムは石堆の如くなり、聖殿の山は木深き高き処となるべし。

4) 禍が襲つて来た。――5) 殺人、

暴利、收賄によつて。――6) 後に

彼らの子孫が誤つた信頼心から

「我らはアブラハムの子であ

る」とキリストに言つたよう

に。約八・三三以下参照。――結

二二・二七。番三・三。

第 四 章

メシア時代の平和—イエルサレムの患難と栄え

一 末の日頃¹⁾に至らば、かくなるべし。主の家の山数々の山の頂に立ち、諸々の丘に抜きんでて聳え、万民滔々として之に赴かん。2) かく多くの国民急ぎ来りて云うべし、いざ、我等主の山に登り、ヤコブの天主の家に至らん。彼その道を我等に教え給うべければ、我等その径を歩まん、是、律法はシオンより、主の御言はイエルサレムより出ずべければなり。三 彼多くの民の間に立ちて裁き、強き国民等を懲らして遠方にまで及ぼし給わん。彼等はその剣を鋤に、その槍を鶴嘴に打ち直すべし。一 国の民他国の民に対して剣を執らず、人々最早戦うことを習わじ。四 各人その葡萄樹の下やその無花果樹の下に坐してあらんに、誰も之を拒む者なからん、それ、万軍の主の口然云いたるぞ。五 実にすべての民いづれもその神の名によりて歩むべし。されど我等は永遠に無窮に主我等の天主の御名によりて歩まん。六 主云い給う、その日には、我跛行く者を集

第四章

1) メシ

アの時

代。

2) 賽二

・二—

四参照

七 め、わが逐おいやりし者ものおよ及びわが打ち懲うららせし者ものを糾ま合とめん。七しかして我われそ

の跛ちんぱひ行ひきし者ものを残余のこれるもの者ものとなし、病やみたる者ものを強つよき国民くにたみとなさん。かくて主しゆシ

八 オンの山やまにありて、今いまより永遠とこしなえに彼等かれらを治おさむべし。3) 八また汝なんじむすめ娘むすめシオンの暗くら

き羊ひつじの塔とうよ、4) 汝なんじきたに來らん、最初はじめの権けん、即すなわち娘むすめイエルサレムおうけんの王きた権けん、來らん。

九 今いま汝なんじ何なにとて憂うれい愁しに沈しずみ居おるぞ。汝なんじに王おうなきか、汝なんじの踏はかる者もの亡ほろびたるか。そ

一〇 は苦痛くるしみ汝なんじを産婦さんぶの如ごとくに襲おそいたればなり。一〇娘むすめシオンよ、分ぶん娩べんする女おんなの如ごとく、

苦くるしみ悶もだえよ、そは汝なんじ今いま都市まちを出いでて野のに住すまい、バビロンバビロンにまで行ゆくべけれ

ばなり。かくて汝なんじ彼かれ処じこにて救すくわれん、主しゆ彼かれ処じこにて汝なんじの敵てきの手てより汝なんじを救すくい給たま

二 うべし。二今いま多おほくの国民くにたみ汝なんじに敵あいついて相あひあつ集あつまれり、彼等かれらは云いう、そを石いし打うちにせ

三 よ、我等われらの目めシオンシオンを觀みるべし、5) と。一三されど彼等かれらは主しゆの御お思かん念がえを知らず、

その御おん計はからいを了さとらざりしなり、即すなわち彼かれは打うち禾ち場ばの藁わらの如ごとくに彼等かれらを集あつめ給たまえ

三 るなり。二三娘むすめシオンよ、起たちて踏ふめ、そは、我われ汝なんじの角つのを鉄くろがねにし、汝なんじの蹄ひまめを青から

銅かねにすべければなり。汝なんじは多おほくの民たみを粉ふん碎さいし、彼等かれらの奪うばいたる物ものを主しゆに、彼かれ

3) 番三・

一九。但

七・二四。

路一・三

二。

4) 羊群を

見張る望

樓として

使つかう城しろの

残骸。

5) その苦

しみを見

物ものしたい

等らの力ちからを全地ぜんちの主しゆに獻ささぐべし。⁶⁾

⁶⁾この予言はバビロンからの帰還後およびマカベオ時代のイスラエル王国復興で一部成就したが、全く実現するのはメシアに建てられた教会においてのみ。

第 五 章

メシアがベトレヘムに生まれ給うこと—その御国の栄え

一 強盗ごうとうの娘むすめよ、汝なんじは今蹂躪いまふみにじらるべし。彼等かれらは我等われらを攻め囲かこみたり。

彼等かれらは杖つえもてイスラエルの士師さばきびとの頬ほおを打うたん。^二さてエフラタのベ

トレヘムよ、汝なんじはユダの幾千いくちゆうの中うちにて小ちいさきものなれども、イスラ

エルに主君きみたるべき者もの、^一わが為ために汝なんじの中うちより出いでん。その出いるは

初はじめより、永遠えいえんの日ひよりするなり。^二 ^三この故ゆえに^三 彼産婦かれさんぶの分ぶん娩べんすべき

時ときまで、^四 彼等かれらを付わたし置おき給たまわん。またその兄弟きやうだいの残存者のこれるものはイスラ

エルの子等こらの許もとに帰かえり来きたるべし。^四 彼かれ ^五は主しゆの御力おんちからにより、主しゆその

天主てんしゆの崇高けだかき御名みなにより、立たちて牧ぼくし給たまわん。彼等かれらは立たち帰かえるべし、

そは今いまこそ彼地かれちの果はてにまで威いを示しめし給たまうべければなり。^五この方かたこ

第五章 一) 待望のダ

VID家出身の王。

2) 天主の御子とし

て。—マテオ二・六。

約七・四二参照。

3) ベトレヘムが甚だ

目だたない町である

から。—4) 天主に約

束されたメシアが現

われ給う時まで。

5) 三節に生まれると

言つてあるメシア。

六 そは平和⁶⁾にて在^{ましま}さめ。アッシリア人我等の国に入り来り、我等の家々に踏み入らんとする時には、我等七人⁷⁾の牧者と八人⁸⁾の君たる人を起^たてて之に敵^{はむ}かわん。彼等はアッシリアの地に剣を、ネムロド⁹⁾の地に己が槍を、喰^{くら}わしむべし。アッシリア人我等の国に入り来り、我等の境内に踏み入らんとする時には、彼之より我等を救い給わん。セヤコブの残存者は人に期待せず人の子等を待たずして、主より降れる露の如く、草葉に宿る水滴の如く、多くの民の中にあるべし。八またヤコブの残存者は、森の獣の中に獅子の居る如く、羊の群の中に若獅子の居る如く、異邦人等のうちに居り、多くの民の只中に居らん。その過ぎ行き、蹂躪^{ふみにじ}り、捉うることあらんか、誰も救い得る者なし。10) 九 汝の手は汝の敵に向かいて拳がらん、汝の仇は皆滅ぼさるべし。一〇 主云い給う、11) その日には、かくあらん、即ち我汝の中より汝の馬を取り去り、汝

6) メシア降誕の時天使達が平和を告げた通り
 7) 七人という数が記してあるのは、多分當時の大国の宮廷に高官が七人いたことに鑑みて帖一・一〇、一四参照。
 8) 即ち普通よりも多く立てられる。――9) 創一〇・八――一二参照。ネムロドという名称は「我らいざ叛逆せん」との義。――10) 創四九・九。民二三・二四参照。
 11) 九節にある希望に対する天主の答え。

二 一の戦車を摧き、二汝の国の諸市を亡ぼし、汝の砦を悉く毀ち、
 汝の手より魔術を奪わん、かくて汝の中に神託なきに至るべ
 一三 し。一三 我また汝の彫刻物、汝の像を汝の中より亡ぼし去らん、
 汝は最早汝の手に成る作を礼拝することあらし。一三 我なお汝の
 一四 並木¹²⁾を汝の中より抜き取り、汝の諸市を滅ぼさん。一四 しかし
 て耳を藉さざる国々の民には皆、我怒り憤りて仇を復さん。

第六章

天主イスラエルを裁き給う

一 汝等主の曰う所を聴け。汝起ちて山々と是非を争い、汝の声
 二 を丘々に聞かしめよ。二山々¹⁾及び地の堅き基は主の御審判を
 聴けかし、そは主その民を是非し、イスラエルと論争い給うべ
 三 ければなり。三わが民よ、我汝に何をなしたるか、また何にお
 四 いて汝を煩わしたるか。我に答えよ。2) 四 それ、我はエジプトの

12) ヘブレオ語「アシエレ
 ン」。即ち女神アスタル
 テの像の付いた柱。

第六章 1) 山は不変、即
 ち不義に対しても屈しな
 い。故によき証人。
 2) 耶二・五。—聖金曜日
 のインプロペリアには
 ここが引用してある。

五 国より汝を導き出し、奴隸の家より汝を解き放ち、モイゼ、ア
 ロン、及びマリアを汝の面前に遣せり。五 わが民よ、請う、モア
 ブの王バラクが企みしこと、またベオルの子バラアムが彼に答え
 しこと、³⁾ セタイムよりガルガラに至るまで⁴⁾ のことを、思い出
 よ、これ汝が主の正しきことを知らんためなり。六 我⁵⁾ 主に応わ
 しきものとして何を献げんや。我至高き天主の御前に跪かんや。
 七 燔祭の贄、及び当歳の⁶⁾ 犢を之に献げんか。七 主数千の牡羊数万
 の肥えたる牡山羊によりて御怒を宥め給うことあらんか。我わ
 が悪の為にわが長子を、わが靈魂の罪の為にわが胎の果を奉らん
 か。⁷⁾ 八 人よ、我⁸⁾ 何が善きか、主が何を汝に求め給うかを汝に告
 げん、そは即ち、公義を行い、憐憫を好み、汝の天主と共に注意
 して歩むことなり。九 主の御声都市に向かいて呼ばわる。汝の御
 名を畏るる人々には救拯あるべし。諸々の族よ、汝等聴け。され

3) バラアムはバラクの望みに従い民を呪う代りに、天主の促し給うままにこれを祝せずに行われなかつた。民二二・五―二四、三五参照。―4) 書四・一九―二〇参照。この二つの場所の間では、なかなくカナアンへの入地が始まり、シナイ山の契約の更新が行われた。―5) ユデア人たちの質問。―6) 最上の。7) 異邦人たちはこうした。―8) 天主の招き。

一〇 誰か之を是とせんや。一〇不敬なる者の家に、なお火あり、⁹⁾ そは不
 義の財なり。またその小さくしたる柵には忿怒満つ。二 我豈悪しき秤
 及び袋にある欺瞞の分銅を是とせんや。二三 是によりてその¹⁰⁾ 富める人
 々は不義に満ち、その住民等は虚偽を云い、その舌はその口にて他を
 欺きたり。二三 されば我汝の罪ゆえに、汝を打ち滅ぼすことを始めしな
 り。一四 汝は食わん、されど飽くことあらじ。汝の屈辱¹¹⁾ は汝の中にあ
 らん。汝は捉うとも保つを得じ。また汝が救いたらん人々は、我之を
 剣に付すべし。一五 汝は種播かん、されど刈入るることあらじ。橄欖を
 踏まん、されどその油を身に塗ることあらじ。また葡萄を搾るとも、
 その葡萄酒を飲むことあらじ。¹²⁾ 一六 汝はアムリの掟と、アカブの家の
 すべての仕方とを守り、彼等の意のままに歩めり、¹³⁾ されば我汝を滅
 ぶるに任せ、その¹⁴⁾ 住民を笑草となさん。かくて汝等わが民の恥辱を
 担うべし。

⁹⁾ 不当に得た財物は、家を焼く火の
 ようなもの。
¹⁰⁾ 九節にある町の
¹¹⁾ 前の高慢の代り
 に。しかしヘブレ
 オ語本は「飢え」。
¹²⁾ 申二八・三八。
 基一・六。——¹³⁾ ア
 ムリ、アカブ両王
 は特にパールおよ
 びアピスの祭祀を
 庇護した。——¹⁴⁾ イ
 エルサレムの。

第七章

イスラエル人の腐敗と改心—全人類メシアによりて贖わるべし

一 我は禍なるかな、そは我秋に葡萄採集の残りの房を採る者の如くなりたればなり。食うべきは一房もなし。わが靈魂初生の無花果を只に望みぬ。

二 聖者地より失せたり、人々の中に直き者なし。彼等は皆血を流さんと待伏し、各人その兄弟を狩りて死に至らしむ。三 彼等は己が手のなす悪を善と呼びなす。侯は貪り、士師は報酬を求む、また偉大なる者はその心魂の欲するままを語りて、これ¹⁾を乱せり。四 彼等の中にて最も善き者も茨の如く、直き者も垣の棘の如し。五 汝の検査の日、²⁾ 汝の応報来る。彼等の滅亡今臨むべし。五 友をも信ずるなかれ、侯伯をも頼むなかれ。汝の懐に眠る女にも汝の口の錠を守れかし。六 それ、息子は父に無礼を働き、娘はその母に、媳はその姑に立ち向かう。人の敵はその家庭の者なり。七 せざれど我は主を仰ぎ見、わが救主なる天主を待ち望まん。わが天主我に応え

第七章 1) イ

エルサレム。

2) 茨や垣の棘に触れると傷つく。— 3) 予

言者達が天罰

の日として告

げておいた日

4) マテオ一〇

・二一、三六。

八 給うべし。八わが敵⁵⁾よ、我倒れたりとて、汝わがことを悦ぶなか
 九 れ。我起き上らん。我の暗闇に坐する時、主わが光たり給う。我主に

罪を犯したれば、その御忿怒を負いて、彼のわが訴訟を裁き、わが権

を認め給う時を俟たん、彼我を光明の裏に導き出し給わん、その時我

彼の正義を見るべし。一〇わが敵之を見ん。「主汝の天主何処にかある」

と我に云う者恥辱を蒙るべし。わが目之を見ん。かくて彼衢の泥の如

く踏みにじらるべし。二汝の石垣の建て直さるべき日、その日には規

定⁶⁾遠ざけらるべし。二三その日にはアツシリアより堅固き諸市⁷⁾までの

人々汝の許に来らん。堅固き諸市⁷⁾より河⁸⁾まで、海より海まで、山

より山までの人々然せん。二四⁹⁾はその住民ゆえに、彼等の企画の結

果ゆえに、寂れ果つべし。二五汝の杖もて汝の民、即ち汝が受け継ぎた

る羊群、カルメルの只中なる森に独り離れて住む人々を牧し給え、¹⁰⁾
 彼等は往古の日の如く、バサン及びガラード¹¹⁾にて草を喰まん。一五汝

5) ことにアツシリア人。 — 6) 敵から押しつけられた。
 7) ヘブレオ語本「エジプト」。
 8) エウフラト河。
 9) 敵国。 — 10) ミケア予言者はイスラエルの牧者たる天主に祈る。 — 11) 特に肥えた牧場があった。

一六 一六 國民等之を見て、己の力全く及ばざるに狼狽し、その口に手を

一七 一七 當てん。その耳は聾となるべし。一七 彼等は蛇の如く塵を甜め、地の

一八 一八 匍うものの如く己が家にありて怖じ惑い、主我等の天主を恐れ、汝

一九 一九 を畏みまつらん。一八 天主よ、誰か汝に如く者あらん。汝は不義を除

二〇 二〇 き去り、汝の世嗣の残れる者の罪を看過し給う。彼は最早その御激

怒を發し給わじ、そは憐憫を欲み給えばなり。一三 彼は翻りてまた

我等を憐み、我等の不義を除き、我等の罪を悉く海の底に投げ棄て

給わん。一四 汝はヤコブに誠実を、アブラハムに憐憫を、施し給わ

ん、是即ち汝が往古の日より、我等の父祖に誓い給える所なればな

り。

12) 天主がミケアの口を借りて答え給う。

13) 耶一〇・六。徒一〇・四三。一四) すべ

てこれらの予言は、他の予言者達のそれ

と同様、一部はバビロンからの帰還後成

就したが、完全に実現するのはメシアの

時代になつてから。

八三三